第１回　富田林市文化芸術振興ビジョン策定委員会　議事録

会議等の名称	：第１回富田林市文化芸術振興ビジョン策定委員会
担当課	：生涯学習課
開催日時	：令和４年７月６日（水）　15 時 00 分～17 時 00 分
開催場所	：富田林市きらめき創造館（Topic）３階　スタディルーム１
委　　員	：中脇（委員長）、中野、花柳、山本、太田、飯田、金、岡、塩見、森下　※敬称略
オブザーバー	：辻野、西村（以上、（公財）富田林市文化振興事業団）
富田林市	：吉村（市長）、山口（教育長）
事務局	：音羽、坂本、正木、黒川（以上、富田林市） 江藤、水野、有田（以上、㈱地域計画建築研究所）
会議の公開等	：公開
傍聴者	：なし

○会議次第

１．開会

・会議の公開・傍聴の許可について

「会議の公開に関する指針」に基づき、公開し、傍聴を許可する。

・市長あいさつ

２．委員委嘱

・代表委員１名に対して、教育長より委嘱状を交付。

・委員長、副委員長の選任

他市における文化振興計画委員及び委員長の経験がある中脇委員を委員長に、学識経験者として委員に就任している山本委員を副委員長として選任する。

（司会進行）：委員長

３．ビジョン策定の趣旨説明

（資料３について説明）：事務局

・平成２９年に「文化振興基本法」が、「文化芸術基本法」に改正され、地方公共団体は、地方文化芸術推進基本計画を策定に努めなければならないとされた。

富田林市でも変化している文化芸術環境の現状を踏まえ、文化芸術の在り方や方針を検討し、今年度中に富田林市文化芸術振興ビジョン（以下、「ビジョン」という。）を策定することを予定している。

・ビジョンの計画期間は、令和５年度から令和１４年度までの１０年間を想定している。国や府の計画との関係を持ちながら、富田林市では総合ビジョンや総合基本計画、富田林市教育大綱を上位計画として位置づける。

⇒この１年でビジョンを策定するには、スケジュールがタイトである。臨機応変に対応しながらスムーズに進めていきたい。（委員長）

４．本市の文化芸術を取り巻く動向の報告

（資料４について説明）：事務局

・平成２９年に「文化振興基本法」が、「文化芸術基本法」に改正され、地方公共団体は、地方文化芸術推進基本計画を策定に努めなければならないとされた。ここに国としての方向性や戦略について記載されている。今後は、文化を文化だけで完結させるのではなく、社会的・経済的価値にも焦点を当てて進めようとしている。（文化の本質的価値）他にも子どもや多種多様な人々が文化に触れられることが期待されている。
・文化に関する世論調査では、現状把握がなされており、昨年度調査では、ウェルビーイングと文化芸術に相関関係があることが示された調査結果が示されている。
・国が策定する文化芸術基本計画の第２期が来年度から始まるが、その議論を６月２９日からスタートしたと報告があった。情報を収集して、富田林市のビジョン策定に落とし込んでいきたい。
・子どもと文化芸術に関する国の動きについて、子どもの芸術教育の所管が文部科学省から文化庁に移管した。学校の文化活動が大切であるとの認識は持っているが、教員の負担が大きいため、休日の活動を学校から地域に移そうとの動きがある。提言が８月に出る予定であり、次回委員会で詳細の報告ができればと思う。
・文化芸術における社会包摂の取組について、文化芸術活動の社会的価値を見出した取り組みであり、障がい者文化芸術推進法及び基本計画が平成３０、３１年に制定・策定されている。文化庁や厚生労働省でも文化芸術を活用した共生社会づくりが進められている。
・文化経済の推進については、文化と経済を上手く好循環させていくために、文化経済戦略や、文化経済について議論する会合が文化庁や経済産業省で行われている。
・文化観光については、文化財保護法が改正され、新しく文化観光推進法が制定され、文化財や文化と観光を上手に組み合わせ、地域の活性化に繋げていく取組もトレンドとなっている。
・文化拠点については、平成２４年に劇場法が制定され、従来では、劇場が貸館等など多目的に使用されていたが、今後は人々の交流拠点とした、文化施設が地域の活性化の拠点になり得る可能性に言及している。
・大阪府ではアーツカウンシルという組織ができ、行政と少々距離を置いて、評価や審査を実施している。
・富田林市の動向については、①上位計画について紹介する。②総合ビジョン及び総合基本計画が平成２９年３月に策定されており、全体的な将来像に関しては、「ひとがきらめき！自然がきらめき！歴史がきらめく！みんなでつくる　笑顔あふれるまち富田林」を目指すとしている。個別施策においては、「市民が文化・芸術に関心を持ち、身近に感じることができるよう、あらゆる年代を通じて、多様な文化・芸術にふれる機会の充実を図ります。」、及び「市民文化の発展に向け、市民文化・芸術活動に関する各種団体とのさらなる連携に努めます」としています。
　本ビジョンでは、これらを具体的にしていきたいと考えています。

富田林市における文化活動について説明：（公財）富田林市文化振興事業団職員

・すばるホールでは、事業展開の主軸を民間参加に置くことを基本とし、鑑賞・参加・連携・支援・育成・創造などを通して、文化の循環が生まれることを目指して活動している。
・市内吹奏楽部に所属している中学生を対象として、すばるホールに集まってもらい、プロの演奏者から直接指導を受ける取り組みを実施した。従来より、学校にプロの演奏家を派遣するアウトリーチを実施している。

・全国初の取組として、地域のピアノ指導者とともに、全日本ピアノ協会の地域事務局を立ち上げ、全国から指導やピアニストをアドバイザーに招聘し、演奏を評価するピアノステップや全国トップレベルの学生演奏者を推薦し、リサイタル形式の演奏の機会を提供するイブニングコンサートを実施した。
・高校演劇の大阪府大会を南大阪で初めて誘致し、今年の３月には全国大会も実施している。
・プラネタリウムについては、年間約１５０件、幼稚園・保育園・学童クラブなどに対して団体投影を実施している。期間限定で、小学生が機材を操作する体験事業を実施している。プラネタリウムで読み聞かせを行う「プラネ de 絵本」は年間１０回、星空赤ん坊会は年４階、星空アロマは年４回、特別企画は年５回実施しており、毎日の一般投影の他に、月２回以上プラネタリウム内でイベントを実施している。
また、聴覚障がい者向けに日本語字幕付きで投影し、ソフト面でのバリアフリーを図っている。
・富田林市文化団体協議会の事務局として、市民文化祭を毎年実施している。各協会の取組に加え、二部門以上がコラボレーションして実施する芸能フェスティバルも行っている。公共ホールの指定管理を受ける団体が、地域の文化団体事務局まで担うのは全国的に珍しい。
・文化庁の補助事業である「伝統文化親子教室」の本市事務局も担っている。
・とんだばやし演奏家協会の協力のもと、市内全小学校の４年生を対象とした音楽出前授業を実施しているが、コロナ禍においては、コンサート会場のピアノの個人利用やＹｏｕｔｕｂｅ動画配信事業も実施している。
・コロナに負けるな企画として、市民講師とのクラフト講座を立ち上げ、月１回実施している。文化芸術割引企画や、コロナ禍において、活動を自粛している団体における、文化芸術活動の再開相談会も実施している。

【富田林市文化団体協議会が調査した平成 21 年度市民文化祭アンケート集計結果の説明】

委　員：事務局からの事前配布資料を拝見したが、中でもアンケートを取ることに関心を持っている。すばるホールからの事例紹介は過去のものであったが、富田林市が策定するビジョンは未来の内容であり、この上をいくものが必要である。事務局でも 8 月頃にアンケートを取るとのことを配布資料で拝見したが、参考に平成 21 年に実施したアンケート結果を紹介する。(配布資料でアンケート結果を報告)

委員長：比較的 50 代以上の市民は積極的に文化芸術的な活動していることが分かった。

【質疑応答】以下、文化振興事業団については、「文」と表記する。

委員長：すばるホールの事例を紹介してもらったが、ご意見はありますか。

委　員：すばるキッズアートフェスティバルに参加したことがあり馴染み深く聞いていた。資料説明について、音楽や演劇内容が多い様に感じたが、モノづくりなどの講座に関しても取組はあるのか？

文　　：現在、クラフトすばる工房という講座のみであるが、コロナ前は、加盟団体の協

力のもとで実施していたことはあった。

委　員：・活動は活発に行われているが、知名度が低い様に感じた。認知度の低さに危機感を再認識した。
・「すばるホールと文化を守り育てる市民の会」を立ち上げた。すばるホールの席数は 800 席であり、ゆったりと市民に見て欲しいとの考えがある。商業的な利益を目的とせず、市民本位のホールを作ったのだと理解できる。商業目的ではなく、市民に活動して欲しいとの考えがあったのではないか。市民が中心となって活動する拠点としてすばるホールを活発に育てていきたい。

文　　：・コロナ禍では、座席に余白が必要となり、イベントも打ちにくい。採算ベース重視では市民に本物の芸術文化を届けることが難しい。共催やプロモーターと一緒に良いイベントを担っていきたいと思う。
・知名度の低さについて、予算や人手の余裕があれば、過去に実施したイベントをまとめた冊子を作るべきではないかとの意見もあるが、業務量の負担が大きく、難しい。
・現在、月 2 回程すばるホール周辺の花や植栽を市民ボランティア（六連花（むつらばな））に行ってもらっている。主の事業では貸会場を行っているので、この事業で得た市民との繋がりや縁の中で次のイベントや取組に繋がっていけばいいと感じている。

委　員：富田林市の文化はすばるホールのみが担っている訳ではなく、公民館活動も活発に実践されていて、全国的にも評価が高い。富田林市内にある３つの公民館内にはクラブ活動がそれぞれ約５０団体ある。自分の地元で文化活動が実施されているこの状態が富田林市の文化の基礎を作っていると考える。富田林市の文化芸術を語るにおいて、公民館で従事する者（公民館クラブで活動されている方）を委員として入れるべきではないかと個人的に考えている。

委員長：この件に関しては、事務局との検討を踏まえて次回に報告する。

１．　フリーディスカッション

委員長：・ここまでの説明を踏まえ、本日は各委員から富田林市の文化芸術振興について、意見をいただきたく思う。ただ、いきなりご意見を求められても困るところもあると考え、議論の風呂敷を広げるための話題提供をさせていただく。
・すばるホールは事務的機能に長け、市民との協働や参加型の取組を企画するのもうまい。2012 年の法律（劇場法）では市民の生活が豊かになるために文化施設で文化芸術活動を行い、質の高い世界に通じることを目指すことなどが掲げられていたが、人口減少社会への突入による担い手不足、震災の発生などで、全国各地でコミュニティが分断されている現状に対して日本は危機感を覚えるようになってきたと感じている。文化施設も単に文化事業だけを行うだけではなく、「新しい場」として「地域コミュニティ創造と再生」などの言葉が出てきた。また、多くの公共文化施設が新しい場は必要であると感じていても手が回っていなかった。

・2003 年の小泉内閣で指定管理者制度が制定され、「質の高いサービス」を求める行為が集客や売上利益重視になっていることに危機感があった。伊丹の文化ホールで勤務していた際、市民理解や地域密着が重要であると考え、ホールから出て行う仕事を行っていた。この仕事の仕方は出張公演などのアウトリーチ的な概念ではなく、地域のまちなかをいかに文化で面白くするかに焦点を当て活動をしていた。伊丹のプラネタリウムでは昆虫館施設があり、文化芸術といった堅苦しい考え方をせず、虫の音を愛で、日本の和をまちなかに届けるイベントを実施した。この経験を機に、市民理解を得ることや共に作る行為が取組の中になければ、税金の無駄遣いだと言われる時がいずれ来ると思った。虫の捕獲や育成、虫かごの作成などを市民交えて専門家のいる昆虫館の担当者と実施するイベント実施した。また、音楽コンサートでは、市民に壇上に立ってもらうのではなく、予算も含め会場を道具として使ってもらい、イベントの計画運営に携わってもらう機会を作った。市民ボランティアや市民連携の運営ために時間を割いた経緯があった。
・ここで質問を投げかけるが、市民参画、市民参加における市民目線での課題について何か意見はないですか？

委　員：市民参画はこれからの前提で進んでいくことは間違いない様に思う。市民参画の狙いは市民の豊かな生活である。市民が参画することで精神的に豊かになっているのか、また市民の心情にどのような変化があるかなどを参加前後でアンケート調査を実施する等によってデータ蓄積及び分析し、市民参画の意味を明確に示す必要がある。

委　員：若者会議に参加するまでは既存の活動に参加するだけであったが、若者会議に参加してみて取組をゼロスタートで作り上げていく経験はとても有意義であった。このような経験で自分がどう生きたいかといった、所謂ウェルビーイングのようなことを知るきっかけになった。

委員長：「取組を一緒に考えませんか？」との問いを投げかけると若者は引いてしまわないか？若者が集まりたくなるようなきっかけは何かあるか？

委　員：興味があっても初めの一歩を自分一人で踏み出すのは大変難しい。学校単位での募集や友達の紹介があれば参加しやすい。誰か信頼できる人が後押してくれたりなどのきっかけがあれば参加しやすい。

委　員：・「声の表現」という講義を持っているが、実際にプロの俳優を呼んで授業をしたところ、開催地であった豊岡まで参加してくれた。
・芸術と芸能は違うと理解している。大阪は芸能色が強く、芸術は非日常であるとの認識を強く持っている。ベルリンに人が集まる理由をあるアーティストに尋ねた際、「何か考えたい人が集まる、それが広場であり劇場である、それは古代ギリシャから変わらない」との返事に感銘を受けたことがある。文化芸術を提供する側の人間は企画段階から主旨（意志）を共有、連携して作品を作り上げる。芸術家は芸術を信じる力が強く、そのような人に人が集まって来る。芸術を発信するにおいて、人を集めることからスタートするのではなく、その芸術の素晴らしさを伝えることができる場が必要であるように感じる。
・伝える手段としては、SNS での情報発信でも若者に届けばいいと思う。「いき

なり芸術だ！」と言わず、その人自身を知ってもらった後で芸術を知ってもらってもいい様に感じる。

委　員：・10 年後の計画としては、いきなり市民参加を進めることは難しい様に思う。それを踏まえて、２つ実施してほしいことがある。
・１つは文化を学校教育の中に入れることで、思いやりや感情などを教える生涯学習の機会を入れて欲しい。学校の現場に文化を取り入れることができれば、富田林市が初の試みになる。
・2 つ目は、個々では優秀な方が多いが、個々で活動するが故に活動や情報が発散してしまっている。未来を築くうえで、歴史を知る機会となる、一箇所に集積された資料館なるものが富田林市にあればいい。

委　員：参加型で実施している教室展などでは、企画者が楽しむことを目的に実施することが多く、施設と何か作っていくといった行動に繋がっていない。市が主催する絵を飾るイベントに参加したこともあったが、話し合いの場はなかった。絵は音楽や芸能に比べて個の要素が強く、参画や協働の方向に持っていくことが難しいのかもしれないが、できれば面白い。

委員長：参加の場を一緒に作っていくことでどのような変化を促したいかを考えることが大切である。ちなみに、何があれば関係者で留まる場から参加型に広げることができると思いますか？

委　員：絵を描いている生徒もそのような環境をイメージしていないと思うが、話せば興味は持つ。

委　員：・鑑賞型→参加型→協働型の流れについて、文化芸術のみではなく市民活動の中でも同じように視点が変わっている。富田林市にも市民協働課ができた。市が参加型を企画した際に、市民がボランティアで参加するといったことは増えてきたが、平場での協働はまだ難しい。一部生まれているところもあるが、文化芸術や市民活動に関わらず、様々な面において、富田林市ではまだ薄い様に感じる。
・子どもの心に種を植える意味で本物に触れてもらう機会を提供できる環境の整備は大切である。市民が公民館で活動する際、広報を用いた施設の予約システムの融通が利かず、貸し部屋等使いづらい。文化芸術活動の支援の工夫などが行政にあればいい。また、連携する際のアイデア出しの捻出力も弱い。

委員長：価値観の違う人同士の仲が良くなったりする上での知見はありますか。

委　員：同じ釜の飯を食うことで人間関係の距離が縮まることは多い。

委員長：質問ですが、バリアフリーの活動で障がい者の方々が逆に主役となる機会はありますか？

委　員：・身体障がい者であるからといって変わったことはない。

・すばるホールが魅力的なホールになるにはどうしたらいいのかという観点で意見を述べたい。すばるホールはホール内レストランの食事の改善に努めた方がいい。演劇や音楽会等も魅力であるが、美味しい「食事」を摂ることもすばるホールの魅力になればいい。人が集まるような食事の提供をして欲しい。市民が良いと思えば、地域の飲食店と連携マップを作って食事を促すことも成功だ。食事も文化である。

委　員：・大阪の国際観光文化都市に「文化」の文字を入れたのは 2 年前である。文化のイメージは京都の方が強いが、歴史を見ると大阪が起点であることも多い。
・鑑賞型→参加型→協働型の流れについて、観光も全く同じである。例えば、寺内町に遊びに来たという経験は参加型に値し、寺内町がまちの人間だけでは維持が困難となった場合に、外部の応援を取り入れる動きは協働型に値する。外部の視点を入れることで、内部の文化芸術が啓発され、市民の品格が高められるといった流れができないか。10 年後の富田林のあるべき姿を市民で意思統一したうえで、何を行動するべきかをさかのぼって考える必要がある。

委員長：どのジャンルにおいても、「協働」がキーワードになるように感じるが、10 年後にどうなっていたいか。富田林市を自治意識が高い地域だと思え、誇りに感じることはあるか？内部のみならず外部から来た人も楽しいと思ってもらえるキーワードがあれば教えてもらいたい。

委　員：保護者にアンケートを取ることはこれまであまりなかったため、今回の取組は非常に重要である。文化行政に関して真摯に向き合っている姿勢を「そういえば、アンケートに答えたな」で終わらせてはもったいない。自分が何かを始めることができた、サークルに入れたなど、仲間との付き合いが生まれるきっかけに繋がればいい。生涯学習課でウェブサイトを立ち上げて「文化の広場（文化の窓口）」なるものを作成し、興味がある人に目が留まり、気楽にアクセスできる環境を整備してみてはどうか。

委員長：外部から見た富田林市はどんなまちなのか？

委　員：文化が豊富にあるまちであると実感している。寺内町に行った際に、芸術に携わる多様な作家と関わる機会があり、面白いまちに来たと第一印象を得た。改めて、SNS で見ると、富田林市内に様々な作家が集まっていることを知った。

委　員：自身の出身は奈良であるが、富田林市は奈良と似ている様に感じる。富田林に住んでいるが、大阪府内の他の自治体のように「せかせか」していると感じたことは無い。自然が豊富でゆったりしている。寺内町も奈良と似ている。河内長野市はだんじり祭りもあるためか少々怖いイメージがあるが、富田林市はそんなことはない。

委員長：富田林市の文化芸術活動における「協働」の取組はあまり強くはないように感じ、課題観も各委員が持っていた。文化施設から出ても街並みから文化を感じること

ができることが文化資源であると思った。今後、ビジョンの素案や方向性について準備してもらい、第２回委員会で再度意見を聞く方針で進めていきたい。

２．　今後の進め方について

委員長：事務局より、今後の進め方について、資料説明をお願いする。

事務局：（資料５　説明）

・ビジョン策定のスケジュールについて、策定委員会は合計４回実施する予定である。２回目を１０月頃、３回目を１１月頃、市民から意見をもらうパブリックコメントを実施した後、４回目を来年２月頃に実施する予定である。短期間ではあるが、市民意識調査と団体意識調査で実態を把握し、ビジョンを策定する。

（資料６　説明）

・今回の調査は３つの集団を対象にしている。
・１つ目は 16 歳以上の市民向けに意識調査を実施する。住民基本台帳から 1,500 件を無作為抽出し、郵送での調査票の配布回収及びウェブ回収を予定している。7 月下旬～8 月のお盆の期間で実施する。目標回収数は全体の 40%を目安に 600 件で考えている。
・２つ目は、小学校 4 年生から中学 3 年生まで（4,972 名）を対象に、ウェブアンケートを実施する。学校側と調整の結果、夏休みの宿題として回答してもらうことを検討している。量は 10 設問で A4 二枚程度である。
・３つ目は、保護者向けアンケートであり、主に習い事に関してウェブ上で問う。以上の調査を踏まえながら本ビジョンに落とし込んでいく予定である。

（資料７　説明）

・また、文化団体にも調査を実施する予定である。まずは８月６日の土曜日に市長との懇談会形式で意見交換を実施する予定である。２回目は今後決めていく。

３．　閉会